

コロナ対応外出自粛中に学ぶ⑤

第5回 山縣有朋と東行庵

●明倫館に入れない身分

東行庵を菩提寺とする高杉晋作と、東行庵の地などを寄贈した山縣有朋は、ともに萩の生まれ。山縣有朋が天保9年（1838）閏4月22日。高杉晋作が1年4か月のちの天保10年（1839）8月20日に生誕しています。家柄は高杉家の200石に対し、山縣家は、下級武士（蔵元付仲間組）で、明倫館にも入れない身分でした。

※伊藤博文・野村靖・吉田稔麿・入江九一・赤根武人・品川弥二郎なども入れませんでした。

明倫館は、萩藩の藩校で、第5代藩主毛利吉元の時代、享保3（1718）年に創立。人材の育成がなにより大切であるとの考えかたに基づいていましたが、身分により、塾に入れない者もいました。

※日本の三大学府＝水戸の弘道館・岡山の閑谷学校・萩の明倫館といわれています。

●厳格な祖母に育てられる

山縣有朋の父：三郎有稔（ありとし）、母：松子。兄弟は姉：寿子がいました。（のち勝津家に嫁ぎ、子ども伊三

郎が、山縣有朋に子どもがいなかったため、養子に入り、山縣家を継ぐ）。

母は、5歳の時に他界し、厳格な祖母に育てられ、槍術にたけた腕前になりました。父は教育熱心で、国学を好

み、和歌を詠む教養人。有朋23歳のとき、55歳で亡くなりました。その祖母は、慶応元（1865）年、近くの橋本川で入水自殺しています。

●藩から京都派遣の一人に選ばれる

15歳で、蔵元兩人下手子役として勤務。（金穀の出納、土木工事、物品購入などをする役所で、その下働

き。次には、藩校明倫館の手子役（仕事の合間に教授や講師の講義を聞いたりしました）。

さらに小郡代官所の打廻手子役（代官の警護役）。進んで御徒士目付の横目付に転じた（目付役の耳目となり、今日の警察のような仕事）。このころ17歳でした。

安政5（1858）年、21歳のとき、伊藤博文・杉山松助・伊藤伝之助・岡仙吉・総楽悦之助とともに、京都に派遣され、京都で政局の情報収集するのが仕事でした。

吉田松陰が、松下村塾を引き継いだのは安政3（1856）11月4日で、6人のうち4人は、塾生でした、総楽と山縣は塾に入っていませんでした。京都滞在は2カ月ほどで、久坂玄瑞なども先に来ていました。玄瑞は、松陰に紹介状を書き、有朋を、松下村塾の門下生に入れるようお願いしました。有朋にとって、久坂は恩人といえます。

●松下村塾に入り「終生の師」を得る

有朋は京都から帰り、安政5（1858）年10月、松下村塾の門下生となりました。松陰は、最初「君の師になる資格なし」と断りますが、有朋が懇願するので、「とにかく、遊びに来るがよ

かろう」といったそうです。

ところが、松陰は、11月29日、自宅監禁を命じられ、12月26日、野山獄に投じられました。ですから、松陰と有朋の接した日数はわずかでしたが、松陰は、有朋には「気がある」、と評していました。有朋は、終生、松陰を師として仰いでいました。

●高杉晋作と意気投合

吉田松陰を師と仰ぎ、尊攘主義の忠実な実践者として邁進することになり、なによりも高杉晋作と意気投合。高杉晋作より1歳年上の山縣有朋でしたが、才能の豊かさと200石とりという有力藩士の高杉晋作を兄のように敬慕し、行動することになりました。

高杉晋作が奇兵隊を創設する前、文久3年（1863）3月15日、

西へ行く人を慕いて東行く
わが心をば神ぞ知るらん

と詠んで、「東行」と称し、10年間のお暇を、と、髪を切ると、山縣有朋も1864年12月末、髪を剃って「素狂」と号しました。すでに文久4年（1864）1月26日以降、山県は、「狂介・狂助・狂輔」と、狂を号として使うようになっていました。それは高杉晋作が、「西海一狂生東行」と号していたからで、高杉晋作の師・吉田松陰は「二十一回猛士」と名乗っていました。

高杉晋作は、文久3（1863）6月、藩主に呼び出され、馬関の防禦を命じられ、正規軍に対して「奇兵隊」を創設。場所は竹崎の白石正一郎宅でした。その後、関門海峡を舞台に活躍することになります。

文久3年（1863）6月7日、高杉晋作は奇兵隊を創設しましたが、このとき、師・吉田松陰の留魂録の言葉「天下のことを成すは天下有志の士と志を通ずるにあらざれば得ず」という言葉から、身分に関係なく有志の者を集めました。それは、幕府を倒し、近代社会をつくるという「志」だったのでした。

このとき、高杉晋作は身分の違いを気にすることなく、山縣有朋を奇兵隊へ誘ったのです。以来、肝胆相許す同志としてその姿勢は、高杉晋作の亡くなるまで続きました。

同年8月16日の夜、正規兵の先鋒隊と奇兵隊が対立し、宿舎の教法寺（唐戸町）を奇兵隊が襲撃する事件が起きました。このとき高杉晋作は両隊を統括できず、27日に藩は奇兵隊の宮城彦輔を切腹させ終結させました。その後、奇兵隊は一旦、防府に転陣し、12月に再び下関へ帰ってきました。

高杉晋作が総督で、山縣有朋はナンバー2の、軍監となりました。有朋は周囲から信望があったことがうかがわれます。教法寺事件で、高杉晋作は責任をとって隊を離れましたが、藩主の側近の奥番頭となりました。二代目総督は河上弥市（「生野の変」で敗れて自決）と滝弥太郎（明治になって司法界で活躍）の二人でしたが、三代目の総督は赤根武人となりました。

高杉晋作は奇兵隊の総管兼政務座（藩政執行の責任者の一人）になりましたが、山縣はリューマチという病気にかかり、萩にいました。

病が治ると12月23日、高杉晋作の推薦により奇兵隊の軍監（総管に次ぐ地位）に任命され、山縣有朋にとって大きな出世でした。

※この年、元治元年（1864）7月17日、山縣有朋の同志久坂玄瑞・入江九一などは「禁門の変」で、戦死または自刃し、いなくなっていました。

●四か国連合艦隊と戦う

1864年（元治元年）8月5日、関門海峡に、イギリス・フランス・オランダ・アメリカの四か国連合艦隊が来襲すると、山縣有朋は、壇之浦支隊での司令を任されました。傷を負いながらも奮戦し、本営は赤根武人の軍で前田に本陣がありました。

このとき、外国の軍艦から大砲を撃ちこまれ、前田・壇之浦（現在のみもすそ川）ともに大敗しました。

有朋の記録「敵の一砲弾が、福田という兵士の腹部に命中すると、全身粉々になって空中に飛び散ったのは、残酷な風景だった。近くのは、空気圧迫のために、数尺外の距離に吹き飛ばされた。これによって、敵の照準が正確であると知った」と、記しています。

この戦で、銃の違いや、戦力に違いのあることがよくわかりました。奇兵隊は「ミニエール」銃は僅かで、あとは、先込式の「ゲーベル」銃と火縄銃、弓槍を持つ者もいて、結果は判然としていました。

このときの講和会議では高杉晋作が活躍。西洋の近代兵器に勝つことは不可能であることがよくわかりました。以後、山縣有朋は、高杉晋作とともに、倒幕を目指し、近代国家の建設を夢見て行動しました。

●高杉晋作の挙兵に反対・大田絵堂の戦いで勝利「藩論統一」

このころ、藩政府のなかには、急進的な改革派「正義党」と、行き過ぎを是正しようとする保守派「俗論党」の両派が、覇権を争っていました。

山縣有朋・福田侠平は、機が熟していないと反対しましたが、高杉晋作は、長府功山寺でこの二つの藩論を統一のために挙兵。従ったのは伊藤博文などわずかに約80人で、新地会所を目指して長府を出発。これが有名な「回天義挙」です。

その後、防府の三田尻海軍局へ行き、軍艦を奪いました。

いっしょに挙兵しなかった山縣有朋は、すぐに思いなおして、12月17日、長府から駕籠に乗って出発、吉田へ夕刻着くと、先に立った赤根武人はすでに出発していました。以後、萩へ向って進みます。萩では、俗論党が、正義党を追討しようと、出発し、両党は、慶応元（1865）1月10日、川上口などで激突し、高杉晋作が到着したのは、16日のことでした。

高杉晋作は、これより前、山縣有朋に手紙を書き「わしとおまえは焼山かづら うらは切れても根はきれぬ」と、記していました。

正義党は、太田絵堂・明木と勝利して萩に入りました。俗論党は、戦争の開始前に、正義党が石州に入ったなら、追討するように頼んでいました。ところが、自分たちが石州へ逃れることになり、津和野藩は、石州青野駅で掠梨藤太ら8人を捕え萩に送還したので、処罰されました。

このとき小田村素太郎（後の楯取素彦）は牢に入れられていましたが許されました。こうして正義党が勝利したことで、藩は倒幕へと意思統一が完全なものとなりました。奇兵隊は、吉田へと転陣。奇兵隊総督は四代目山内梅三郎となりましたが、彼は寄組士でまだ数えの17歳、名ばかりであったので、隊の実権は軍監（副将）の山縣有朋と福田侠平が掌握していました。

●小倉口の戦いを実質統括

慶応2（1866）年6月、小倉口の戦争（幕長戦争：幕府は孝明天皇に許可を求め、10万石の削除と、藩主父子の隠居を命じたが、長州藩は応じなかったために、四つの境界で戦争となりました）が始まる。

そのころ、高杉晋作は外国を視察したいものと、伊藤博文と長崎へ行っていましたが、戦争が始まるということで、それでは軍艦が必要になると判断。独断で汽船「オテント」号を購入し、関門海峡へ戻ってくると、海軍の総督となりました。

まず行ったのは、大島郡が松山藩兵に上陸され占領されていたので、それを奪還するために停泊していた幕府軍の軍艦を砲撃し、関門海峡へ帰還しています。その後、大島郡は第二奇兵隊が上陸し奪還しました。

いよいよ小倉藩との戦いとなります。このとき、高杉晋作は山縣有朋と相談し作戦をたてています。このころから、高杉晋作は、結核が重くなり、有朋にたよっています。有朋は、高杉晋作に身分をひきあげてもらった恩誼もあり、忠実にその恩に感じ行動することになります。

長州軍は、奇兵隊と長府藩の報国隊で約1、000人。幕府方は、小倉・肥後・柳川・唐津・久留米藩など約20、000人が動員されました。6月17日、開戦のとき坂本龍馬も「桜島丸（長州藩が薩摩名義で購入し、「オテント丸」龍馬が乗って関門海峡に来ており、高杉晋作の作戦を応援しています。

戦争は17日の午前3時、対岸の「田の浦」などの奇襲から始まりました。この戦いの最大の激戦地は、門司と小倉の境の赤坂で、ここを得るか失うかで、勝敗が決する場所でした。

7月27日、13時間にわたった戦いで、奇兵隊小隊長山田鵬介など20余名の戦死者が出て、敗北しました。

この地、赤坂には、「長州軍戦死者」の墓が並ぶ墓地が現存しています。

しかし、小倉藩でも大きな痛手を負っていました。28日は、小競り合いで、29日敵の姿はなくなりませんでした。

8月1日には、小倉藩は自ら城に火をつけ、田川郡香春町へ退却しました。この急転開は、7月20日、将軍家茂が大坂で病死したことが主因でした。

長州軍は、小倉城の三の丸にあった藩校思永館から、多くの書籍を戦利品として持ち帰りました。他には、灯籠（東行庵・太田絵堂の金麗社）や大太鼓（新地の巖島神社）なども持ち帰りました。

8月から、小倉城下は、長州軍が占領していましたが、小倉藩はゲリラ戦に転じ、10月まで長州軍を苦しめました。結局、慶応3（1867）年1月22日、終戦の講和がなりました。この間山縣有朋が中心となって折衝しました。

※小倉藩小笠原家は、徳川家康の外曾孫である忠真（ただぎね）が、寛永9（1632）に入つて来て以来、普代大名の筆頭として、外様大名の監視を任されていました。

●高杉晋作の亡きあと、石川友子と結婚

慶応3年（1867）4月14日、高杉晋作が亡くなると、山縣有朋が中心となって、吉田で神式の葬儀を行いました。当時、奇兵隊の本陣は吉田にあり、庄屋の末富虎次郎家には本営が置かれていました。高杉晋作の墓地の選定に尽力したのは、末富虎次郎でした。山縣有朋はこうしたことから末富虎次郎と親しく、結婚するまでの2年間、二階の一室に下宿していました。

高杉晋作の葬儀が終わると、山縣有朋は、京都の情勢がどのようになっているか、現況を確認したくなって5月10日京都へ入りました。すでに、慶応2（1866）年1月、薩長同盟は成立しているため、島津久光や西郷隆盛や小松帯刀など重鎮と会見し、連携を密にしています。

京都から帰藩すると、山縣有朋は、慶應3年（1867）7月16日、石川友子と結婚。結婚式は湯玉でありました。（現在の豊浦町湯玉）（以前、父親の石川良平が、山縣有朋の申し出でに対して、強く反対したとき、高杉晋作が「将来、立派な人になる」と、お願いしたという逸話が残って

います) 山縣有朋29歳の直前、友子は14歳でした。友子は、和歌・いけばな・音曲・裁縫にすぐれた才女で、新婚生活は現在の東行庵の辺りにあった「無隣庵」で営み、その心境を

「隣りなき世をかくれ家のうれしきは月と虫とに相宿りして」と詠んでいます。

※当時は、近くには家はなく、松林などにかこまれた、さみしい所でした。現在の東行庵の庭あたりです。

●戊辰戦争で参謀

慶応3(1867)12月9日、「王政復古」の大号令が発せられ、徳川政権は完全に消え去り、三職(総裁・議定・三与)による新政権が誕生しました。徳川慶喜は完全に新政権からはずされていきました。

徳川慶喜はこれに怒り、慶応4(1868)1月3日、鳥羽伏見での戦いとなり、戊辰戦争へと発展して行くことになります。

このとき、旧幕府軍(15,000人)、薩長軍(薩摩3,000人。長州1,500人)でした。1月4日、薩長軍の陣営に錦旗(きんき;朝廷から錦の旗)が揚がると、流れが変わり、「官」対「賊」ということになり、土佐藩などが続々加わることになり、徳川慶喜は大敗のなか6日の夜、大坂を脱出し江戸へ帰ってしまいました。

朝廷は有栖川宮熾仁親王(たるひとしんのう)を東征軍の大総督に任じました。

奇兵隊は、3月17日、吉田の陣を出発。清末・長府を経て、下関に着き、極楽寺・阿弥陀寺で休憩し、華陽丸に乗りこみ出港しました。20日の朝、兵庫に着きました。

長府藩の報国隊も出兵することになり、慶応4年(1868)4月18日、長府藩に北越出兵の勅許が下りました。閏4月5日、総督を三澤東市介、軍監を熊野則之(直介)とした報国隊4個小隊(兵員200人)が北越へ出発。一行は同月9日、敦賀港到着、19日、直江津へ上陸、同日高田へ布陣しました。

次いで、5月18日、さらに要請があり、報国隊を含む長府藩兵85人を急派しました。さらに6月15日、長府藩兵20人を差し向け、派遣されました。7月以降も派遣要請がありましたが、元敏侯は、補充人員不足と断っています。

このとき、山縣有朋もいて、福田侠平とともに時山直八らと会合しています。その後、山縣有朋は福田侠平と江戸へ行くことになります。

4月14日に江戸に着くと、東征軍参謀の西郷隆盛と勝海舟の間で、すでに4月11日に江戸城無血開城が実現していました。その後、5月15日には上野に籠っていた彰義隊(2,000人以上)は、新政府軍の猛攻撃で壊滅しました。

山縣有朋は、江戸から西郷隆盛とともに船で大坂へ向かい、閏4月5日に着きました。山縣と西郷は過去にも会っていますが、山縣が西郷の考えに心酔し、西郷も山縣を見どころがある、とお互いに信頼関係にありました。(このとき、のちの西南戦争で相まみえるとは、予想もできないことでした。)大坂に着くと、奇兵隊はすでに、出発していました。

山縣有朋は、4月23日付けで「北陸道鎮撫総参謀」となり、薩摩藩は、黒田清隆がなりました。

●戊辰戦争で勝利

奇兵隊は、4月25日に京都を出発し、琵琶湖の西岸を経て陸路越後高田には、閏4月19日に到着。徳川慶喜は、すでに水戸に引きこもっていたので、会津藩と庄内藩が対戦の相手となりました。仙台藩では、5月3日、東北二十数藩で、「奥羽列藩同盟」を結成しました。

山縣有朋は、高田に着くと、薩摩藩400人、長府藩200人が、着いていました。高田藩は譜代ではありましたが、新政府軍に味方することになっていました。

長岡藩は、軍務総督の河井継之助（42歳）を小千谷に派遣し、慈眼寺で岩村精一郎（24歳）らにあつて、武装中立を嘆願しましたが、認められませんでした。談判は決裂し、長岡藩は抗戦を決意、戊辰戦争となりました。

5月12日、山縣有朋は、時山直八とともに信濃川を渡り地形を視察しました。敵は、山の高い場所において、我々はみんな低い位置にあり、朝日山という高い山を砲撃し奪うことが必要と考えました。進撃部隊の指揮官に時山を定め、時山と分かれましたが、それが彼との最期になりました。時山は、奇兵隊200人を率いて朝日山に突入しましたが、濃霧の中、長岡や桑名の同盟軍に撃退されました。榎方面は、信濃川を挟んで持久戦となりました。

鎮撫使西園寺公望（きんもち）も今町に入港して高田に赴きました。一方、同盟軍も兵力を増強して反撃の機をうかがい、6月2日、三方から今町に攻め込んできました。この戦いで報国隊軍監熊野直介が戦死しました。こうして、新政府軍の防禦は崩れ、退却をよぎなくされました。

その後、長岡城を西軍が攻略したものの、奪還され、さらに奪い返すという攻防など苦戦をへて、河井継之助が受けた傷が悪化して死亡すると、会津へと進攻することになりました。

白河口からの新政府軍は、少し早く8月23日、会津若松城下に入り、城を包囲。以来ひと月にわたる籠城戦が繰り返されました。9月16日になって、会津藩の秋月悌次郎など三人が、密かに降伏の準備に動き、20日になって、その使者に対して、

大手城門に降伏旗を建てること。大小銃器を引き渡すこと。松平容保父子は軍門に降伏の手続きを終え、会津若松の妙国寺で謹慎することなど、を指示しました。そして、22日、城中に白旗が建てられ、松平容保父子が大手門外に出て、謝罪表を示したので、新政府軍は、坂下まで引き揚げました。

会津藩の秋月は、9月22日、旧知の干城隊参謀奥平謙輔に手紙を書き、降伏を知らせました。奥平は最後まで徳川家につくした会津を称えました。奥平を信頼した秋月は、会津の少年三人を托しました。その一人が、後年、帝国大学総長・九州大学学長となった山川健次郎。もう一人に、山口県へ連れてこられ、美祢の高見家で育てられた飯沼貞吉で、後年、逓信省職員となり、赤間関に赴任しています。明治時代の電信電話の発展に寄与しています。

ところが、戦火は北海道に飛び火したものの、明治2（1869）年5月18日、旧幕府軍の立て籠もる函館の五稜郭が陥落。ここに新政府軍3,547人、旧幕府軍4,690人の戦死者を出し、一年半に及ぶ戊辰戦争は終結しました。奇兵隊は、11月3日、京都に凱旋、12日に山口に帰っています。福田侠平は、下関に帰着後、亡くなり、遺言により、墓碑は、高杉晋作の隣に建っています。40歳でした。

●吉田へ帰着

山縣有朋は、会津の終結後、帰路につき、12月ころ、下関市吉田の山縣宅（無隣庵といって、現在の東行庵の前庭あたり）に帰っています。

このころから、「無隣庵主」の号を使うようになります。少し落ち着いた時代となり、「狂」という号から改めています。

そして、高杉晋作の愛人であった「おうの」に、所有する財産を贈っています。内訳は宅地214坪。田地6畝17歩。畑地8畝20歩。山林1反9畝18歩。に加え、建物（無隣庵）でした。（これら固定資産の登記は明治7年）。これは、高杉晋作への敬慕と、おうのの生活が安定するようにと

祈る優しい山縣有朋の心の現れでした。

山縣有朋の妻友子もおうのへ、心づくしの品物を贈るなど、細やかな心を通わせています。

この間、明治2（1869）、かねて欧州視察を嘆願していた許可が出たことから、5月23日、吉田の奇兵隊本陣を去り、6月3日下関から船で長崎へ向かっています。

6月28日、長崎を出発し、明治3（1870）年8月2日、帰国しています。

これより先、6月2日、戊辰戦争の功績により、永世禄600石が与えられています。

●高杉晋作の愛人、おうのの面倒をみる

さらに、明治8年（1875）には、おうの（初代庵主梅処尼）の生活資金を案じ、1口40円の寄付を伊藤博文など奇兵隊の縁者に呼びかけ、総額750円を集め贈っています。

さらに、明治17年（1884）には、毛利元昭侯の55円を筆頭に、山縣有朋など50円の者が並び、総額で1、550円のお金を集め、初代庵主梅処尼は現存する東行庵を建設しています。

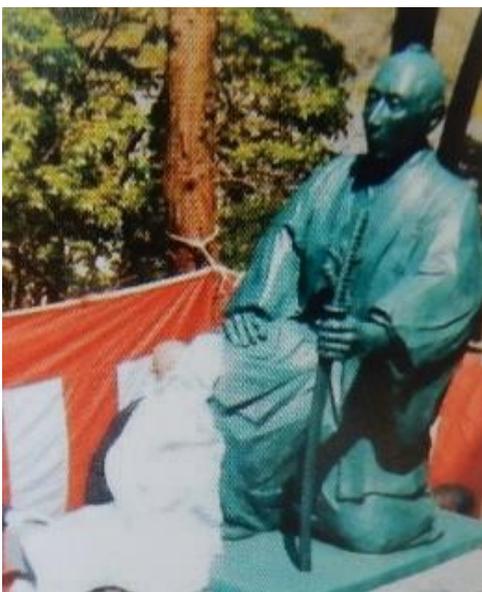
このときも、山県が先頭にたって、資金つくり奔走したことは、想像に難くないことです。

山縣有朋は、明治35年（1902）、明治天皇の西下の折、下関で迎えるため先発し、途中、吉田で高杉晋作の墓に参り、おうの（初代庵主梅処尼）を慰めているほか、明治43年（1910）5月20日の高杉晋作顕彰碑除幕式にも当然参列。このとき吉田小学校へ100円の寄付も行っています。

●吉田の住民が有朋を顕彰

このような恩誼あふれる山縣有朋の行いに、吉田在住の先人は、昭和十年代のはじめ（未確認）、感謝の念と、のちに陸軍元帥として第三代総理大臣として日本の近代国家建設に力を尽くした功績を称え、顕彰することから銅像を建立しました。

そして、太平洋戦争の最中（昭和18か19年）、銅像は金属供出によって悲運にもその姿を無くしてしまいました。以来、およそ70年。平成26年3月、高杉晋作の銅像を建立したのに続き、山縣有朋の像を再び建設し、高杉晋作ともども顕彰し、その功績と感謝の念を後世に語り継ごうとの動きが始まり、現在の山縣有朋の銅像が建立されました。



（山縣有朋銅像）